境守備隊となる。「周りの部隊を結集した。二十年八月二日、奉天の南の昌図に移動した。米軍に備えたが敵は違った。その効なく敗戦となる。」

昭和二十四年九月三十日、ナホトカを出発して、十月三日に舞鶴を出発して郷里へ帰る。

原田村も掛川に合併して掛川市となる。黒田さんも市の収入役の職を勤め、退職した。昭和五十四年一月十四日、全抑協掛川支部ができて、原里の支部役員として現在に至っている。

（静岡県　石川　博）

シベリア強制抑留を省みて

長野県　北野和人

臨時召集を受け瀬江の新設独立混成土屋旅団に入隊したのは、終戦も間近い昭和二十年七月二十日の事であった。

歩兵當山大隊新保中隊に配属となり、中隊行李班を命ぜられる。行李班と言っても唯一人、しかも馬も車両も間に合わず、車馬の来るのを待つ、その折旅団司令部電話室勤務を命ぜられて任務に就く。

本隊は数日の訓練を受けた後陣地構築のため程近くの小高い丘の陣地に登る。

それより暫くして八月九日朝、軍司令部より「旅団参謀を呼べ」との電話が入る。参謀を探して来て参謀が電話室に入り受話器を取り二、三言話したかと思うと「屋内にいる者は全員外に出ろ」と命ずる。

暫くして全員集合の命令に全員練兵場に集合すると「重要な職場以外の者は全員陣地に登れ」と指令が出る。

「北野は司令部へ行け」と言われ司令部に行くと、旅団長閣下の家族が日本に帰るから旅団長当番の吉田と二人で荷物の梱包の手伝いに行けと言われる。

吉田さんは同中隊で瀬江の町で料理店を経営する御主人だった。手伝いの後特別一泊の外泊を許可してくれた。

後で考えると吉田さんに家族と最後の別れの機会を

与える旅団長の配慮だったと思う。
手伝いを終え、吉田家にお世話になり、翌朝部隊に帰る途中、突然ソ連機が三機来襲し低空飛行で機銃掃射をして行くも無事隊に戻る。
十三日になり全員陣地に登り、陣地を整理、持てない器材を処理し、全員隊に戻る。
翌十四日ここを引き払いハルピン郊外において最後の一戦を交えるということで、立つ鳥後を濁さずと兵舎の清掃を行い、真夏というのに真新しい冬の一装に着がえ、急造の十キロ箱爆雷を抱き敵の戦車と討ち死にする覚悟で列車に乗る。
列車はなかなか進まず、十五日一時頃瀬江と斉々哈爾の中間位の駅で停車した時の事であった。
鉄道警護隊員が近づき、陛下の放送があまり良く分からなかったが、日本は戦争に負けたらしいと聞かされ、車内は騒然となった。
半信半疑の中に列車は斉々哈爾の駅に着く。斉々哈爾にて下車、駅近くの留守部隊の兵舎に入り、ここで終戦を知らされる。
張りつめた気持も一気に抜け去り唯呆然となる。翌日貨物廠に移動するよう指示が出され貨物廠に行くも既にソ連軍に接収され更に兵器廠へと移る。
中では終戦を知らずに作業をしていて終戦を知らされ驚く。倉庫の一棟を清掃して宿舎をつくり、ここで日本へ帰る日を待つ。
日本に帰る日を待ち詫びている中に九月十四日突然全員集合がかかる、さては日本に帰れるかと喜び合い集合すると、只今から臨時作業隊を編成する。熊谷大隊と當山大隊を併合し臨時作業隊熊谷大隊を編成し出発する、各自準備を整えて整列せよとの命令。
各自携帯品を整理し、身支度を整え出発の準備をなし集合。行李班は馬と軽車両を受取り中隊本部で荷物を積み中隊の後尾に整列する。
各中隊は、四列縦隊に並び待っているとソ連軍が来て点検が始まる。四列では数えができないから五列に並べとは驚く。五列に並びかえると何回か数え直しようやく納得し出発となる。
大陸の秋の夕陽がようやく西に傾く頃斉々哈爾の街

を行進していると、道の両側から「兵隊さーん兵隊さーん」と声を限りに叫ぶのが聞こえる。

働ける男子のほとんどが召集され、残された婦女子が各地から避難して来た人々でしょう。

今まで頼りにしていた精鋭関東軍、今はマンドリン（自動小銃）を肩にしたソ連軍の監視兵に見守られて行く姿は、これ等の人々になんと映った事でしょう、まことに情けない限りだ。

やがて日は沈み大陸の草原に夜が来れば晝間の汗は冷え、夜露と共に身に滲み疲れも増して来るし腹も減って来る。

途中草原で小休止、携帯食の乾パンを食べまた出発。東の空も白みようやく夜の開ける頃楡樹屯に着く。

早速飯盒炊飯をして朝食を摂る。駅近くの引込線には既に我々の乗って行く貨物列車が入っている。

朝食後休む間もなく貨車積みの使役、行李班は先頭の大きな貨車に六個中隊分の馬六頭を前の半分に積み馬糧用の高粱、携帯馬糧、乾草、それになんのためか固形パラフィンを多量に積み込む。

それに馬の給飼袋、水嚢、馬の手入れ用具等を積む。後の半分は二段に仕切り、大隊本部班と合流して二十名位で乗る。

一般隊員の乗る貨車は小さな貨車を三段に仕切り、座れば頭が支え、身動きもできない有様。

やがて列車はハイラル方面に向かって発車、人々の話では満州里・ハイラル方面の戦跡の整理をして終れば日本に帰るとの話だった。

やがて列車は札蘭屯を過ぎハイラルへ近づく頃より両側に兵舎の焼け落ちた跡、戦死した人の亡骸らしきもの、馬の死体、自動車の残骸等が散乱し一か月を過ぎた今も何と無惨な光景が目に入る。やがてハイラルを過ぎ、いつ停車するかと待っていたが、満州里のソ満国境を過ぎるも停る事なく、列車は西へ西へと走り続け、我々の最後の夢も打ち消されて終った。

日本へはいつ帰れるのだろうか、残してきた家族は、日本の国はどうなっているだろうか、不安は積もるばかり、そんな思いはよそに、列車はただ西へ西へとシベリアの大草原を走り続けるばかり。

食べる物も底をつき水筒の水もなくなり疲労は増すばかり、また困ったのは用便、便所とてなく小便は窓からできても大便には困り果てた。列車は時折停車してもソ連の警備兵がすぐに降りて来て、外に出ようものならすぐマンドリンが火を吹く。

時折配られる小量の黒パンでは腹の足しにもならぬ。こんな事がいつまで続くのだろう、その点私達は、馬の世話は大変な仕事だったが、機関車の燃料補給、給水等で停車する度警備兵が来て馬へ与える水を汲めと指示がある。

従って水には困らず、幸にパラフィンが積んであったので、進行中ソ連兵は来ない、その間に馬糧の高粱を炊いて空腹を補う事もできた。

そんな日々が十日余り続いたある日、燃料補給のため列車は小さな駅に停車、いつものように水汲みにおりると、本部通訳が来て「明日の朝になるとバイカル湖が見える、バイカル湖を過ぎるとイルクーツクの街が見える、それから二日目にクラスノヤルスクに着きそこで下車だそうだ」と教えてくれる。

話の通りバイカル湖が見える、始めて見るバイカル湖、さすがに大きいのに驚く。やがてイルクーツクも過ぎ、楡樹屯を出てから十二日目、九月二十七日クラスノヤルスクの手前プロシャトカという小さな駅に停車、ここで下車、長旅の疲れにやれやれと一息、しかし降りて見て驚いた、日本では未だ秋半ばというのに外は猛吹雪、シベリア下しならぬ北極下しとでも言おうか寒さで震え上る。

全員整列し、いよいよラーゲル（収容所）に向けて出発、車中の疲れにこの猛吹雪の中をどこまで歩くのかと心配していたが、ラーゲルは意外に近く駅より五、六百メートルのところにあった。

広い草原の中に高い板塀その上に鉄条網を張り巡らし四隅に高い望楼、その中に木造の粗末なバラックが何棟か建っている。

これが我々の生活の場となるクラスノヤルスク第三ラーゲルである。

バラックの中に入って見ると三段に区切った板張りの床、それが一棟に三列になっており、来る時に乗っ

て来た貨車と同じようである。

聞けば前には受刑囚の収容所に使っていたらしい。夜ともなればこの床に一枚の毛布を敷き三人で二枚の毛布を掛け、上に防寒外套を置いて寝る、身動きもできない有様だ。

それに夜中ともなれば南京虫とシラミに悩まされ安眠も出来ない状態、また冬の舎内は寒く石炭ストーブは思うように燃えない。

全員が作業から帰って来ると人間の熱で漸く暖まるといった状態だ。

食事も酷く、皮付きの高粱か粟の粥が飯盒の蓋に一杯程度、時には豌豆の粥と言うよりお湯の中に豌豆が浮いている位の物、キャベツの捨てる下葉の茹でた物、夜は時に黒パンが二百グラム位。

配分に当たっては初年兵が当番となるが大変である。上級兵の中には自分が多く食べたいばかりに文句をつける者もいる。「その配分はなんだ、班長殿にはもっと多くしろ」と言う。

それは上級者には多くしろという意味である。

仕方なく言われた通りに配分。「班長殿食事の配分終りました」と報告した。

我々の森井班長出てきて一廻り見廻して「この配分はなんだ、こんな配分では俺は食べん。全部同じようにやり直せ」、配分をし直すと「よし」と一言、その後「皆んな良く聞け、いつ帰れるかわからん。全員日本に無事帰らなければならない。その為には食事はもちろん、食事当番も作業もその他一切みんなで力を合わせ同じようにやるんだ。文句のある者は俺に言え」。その厳しい一言に誰も何も言えず、その後文句をつけて来る者もいなくなる。

そんな生活の中で入所二日目より作業に出される。新保中隊はジエルというアパートの建築作業に、私達は行李班として馬の世話とその外は大隊本部班と共に雑役の仕事が多かった。

そんな事をしていた十一月末の或る日、突然本部に呼ばれると本部の猿渡通訳が「お前は第五ラーゲルまで連絡に行って来いという命令だ」と告げる、「誰か一緒に行くのですか」と聞くと、ソ連将校と一言二言

話して「マヨール（所長）の命令だ、一人で行って来い」と言う。

一瞬驚きと不安で目の前は真っ暗、足が震える始末、果たして行って来れるだろうか。隊列を離れただけでも射たれる位の中であり、初めて行くところ、言葉もわからなければ字も読めない。しかし行って来なければならず覚悟を決めて、地図を書いて貰い通訳に日本語を書き添えて貰い、向こうに持って行く書類と連絡の証明書を受け取りラーゲルを出る。

生憎の寒い吹雪の日だった。ラーゲルの正門も駅も証明書を見せると通してくれ、プロシャトカの駅のホームに出て列車を待つ。

定時より二、三十分遅れて列車が入る。五～六人の客に続いて列車に乗る。列車の中は日本の寝台車風にできていて、一室六人掛けの目隠板の椅子になっていて、上の棚を下げれば寝台になる。

中は意外と広く、真ん中にストーブが置いてある。躊躇して中に入れず立っていると、先に乗った、上流家庭の奥様風の二人と十二、三歳位の女の子が、「ヤポンスキーサルダート（日本の兵隊中に入れ）」と手招きをし袖を引いて中に入れてくれ、ここに座れと指をさす。

言われるまま掛けると、色々話しかけてくるが残念ながら全く分らない。

その中、手真似、物真似でどこへ行くと尋ねるらしいので、早速書いて貰った地図を見せ「ヤポンスキーピヤチラーゲル（日本第五収容所）」と指を差すと「ヤーズナイ（私知っている）」と言って地図を見せ、その先を差し、私達はここまで行くから一緒に行って教えてあげると言う。

今までの緊張も一時に弛む、地獄に仏とはこんな事だろうか、安心して片言のロシヤ語と手真似、物真似で話している中に、手下げ袋から乾パン風の菓子を取り出し私にも食べろと一つ出してくれた。腹の減っている私には今も忘れない味であった。

一時間半位乗ったろうか列車はクラスノヤルスク駅に着く。列車を降り薄暗い駅舎を出て駅前広場を左へ、帰りの道を違えないように辺りを見廻しながら行く。

六十万の大都市にしては商店もなく殺風景な街並だ。二、三十分も歩くと「ここだ」と指差す、第五ラーゲルとすぐにわかった。「スパシーバ（有り難う）スパシーバ」と繰返し礼を述べると「パジャールスト（どういたしまして）」と何気なく手を振り去って行く。

その後姿を見送りながら、日本では考えられぬ事だと思う。汚い身形の日本兵にこのように親切にして貰えるとは思いもよらずうれしかった。

正門の警備兵に証明書を見せると「ハラショ、ダワイ」と中に入れてくれた。中に入って行くと三、四人の日本兵がいる。早速近づいて「第三ラーゲルから連絡に来たが通訳はどこにいるかね」と尋ねると、一人が「呼んで来てやる」といって立ち去る。

通訳の来るまでの間お互いのラーゲルの様子など話し合う。他のラーゲルの人と会う機会など全くない。

お互い様子を知りたかった。その中に「君の出身県は」と尋ねられ、「長野県です」と答えると、「俺は佐久だよ、君は」と聞かれ、「上伊那の美篶村です」と言うと、「美篶村と言えば宮下（現加納）武彦という人を知っているか」と聞く。

その名前を聞いて驚いた。宮下君とは小学校の同級生で義勇軍の訓練を共に受け、彼が現役入隊するまで一緒の十数年来の友である。このシベリアで懐かしい名前を聞こうとは思わなかった。その事を話し安否を尋ねると

「元気で作業に出ているよ」と答が返ってきた。

直ぐにも会いたいがそれも叶わない、諦めるよりない。

間もなく通訳が来て本部へ同行し、すべての用件も済ませ、クラスノヤルスク駅より列車に乗る。

大任を果たした安堵と今日一日の思いもかけない心温まる出会い。シベリアへ来て初めて味わう満足感のようなものを一人抱きしめラーゲルに帰る。

十二月に入って本部班、行李班は解散となり本隊と共に作業に出る事になった。

作業はアパートの基礎の穴掘り作業で、凍り付いた大地は鶴嘴もよせつけない。鉄の矢を大ハンマーで打ち込み砕いて掘る方法である。

ノルマの一割にも満ない「ダワイ、ブイストレ」と急き立てられても腹は減ってふらつき、重い防寒外套を着ての重労働に加えて零下四十数度の寒さに作業が捗るはずがない。

シベリアの冬は日が短く二時半廻れば日が沈む。長い一日の作業を終え帰路に着く五時頃には既に真っ暗、作業の疲れと空腹でふらつき、鉄道のレールを越す時など手で足を持ち上げやっと渡る有様である。線路につまずきバッタリ倒れ意識を失い、そのまま息を引き取った人さえ出る状態。

足や体に黒い小さな物が一ぱいできる。軍医さんに診て貰うと極度のビタミンB・Cの不足に加え塩分の不足だと言われた。

この頃より栄養失調による死亡者が続出、痩せ衰え骨と皮ばかりの遺体は、被服を全部脱がされ解剖されて素っ裸にされ、天幕の安置室に入れられる。

死んだ人には申しわけないが埋葬が大変だ。一日の重労働から帰り、僅かばかりの粟の粥をすすり休む間もなく埋葬の使役、二〜三台のソリに棒のように凍った遺体を四〜五体乗せ、一台のソリを四〜五人で引き、三〜四キロ離れた南の丘に埋めて来るのだが、土は凍っていて掘れない。

監視兵は「ダワイ、ブイストレ」と責め立てる。仕方なく吹き溜まりの雪を掘り、その中に十数体の遺体を入れ雪を掛けて埋め両手を合わせ帰る。休みなどなく明日もまた作業に出なければならない。

この頃盛んに東京ダモイの話が出る、コックリ様のお告げがあったという話、もう一つは我々が楡樹屯を出る時積んだのが三か月分の食糧で、これが終る頃には帰れる。そんな話を信じながら帰る日を待つ。

しかし年が明けても東京ダモイは実現せず、寒い中での作業は続いた。

二月下旬、身体検査が行われ、裸になり、ソ連軍の女医が尻を摘んで見て一級、二級、三級と区分する。

一級は労働、二級は軽作業、三級は休養と分けられる。この頃より燕麦の粥が出るようになり、塩分も多少は出て少しは改善されたが、未だ労働に耐えるには程遠い。

お互いに集まって話すのは、早く日本に帰って白い米の飯が腹一杯食べたい事と故里の名物の話をして懐かしんでいる位である。

二十代、三十代の盛りの男が数人寄れば色話しの一つも出ようというものだが、そんな話をする元気のある者は一人もいない。

やがてシベリアにも春が訪れ、重い防寒外套も脱げ、氷も解けて作業も何分捗るようになった五月、突然この班は夜間作業に廻るよう指示される。

夜間作業は夕方五時から夜中の一時までで、仕事はアパートの基礎のコンクリート打ちである。

ターチカ（鉄車輪の一輪車）にミキサーで練ったコンクリートを運び打ち込む仕事と、ミキサーのホッパーに材料を運んで入れる作業である。

夜間作業とはいえシベリアの夏の日は長く、九時頃までは真夏の太陽が照りつけて暑い。腹は減り腰がふらつき倒れそうになりながら押す。真っ赤な太陽が北の地平線に沈む頃、だれが歌うともなく（沈む夕陽にターチカ押せばヒラリヒラリと散るケシの花、己一人は弱くとも妻子思えば沸く力）そんな唄を歌いながら日本に帰る日を夢見て、お互い励まし合いながら、長い一日を過ごし、作業を終えてラーゲルに着くころには夜明けの空が明るく白んで来る。

そんなある日の出来事だった。ミキサーを操作していた若い女性がホッパーの下の砂利を浚えというが、今まで何回か浚っている頭の上へホッパーを下げ驚くのを見て喜んでいる。

危ないので相談して浚わない事にしていると、大声で騒ぐので、長山通訳が話をし、絶対にしない約束をした。しかし長山通訳自身中に入り浚っていると、例により下げてきた。不運にもホッパーは途中でとまらず落ちてしまった。

急いで抱き上げたが意識不明の重体で大騒ぎとなった。

間もなくトラックが来て街の病院に運ぶというので誰か同行するよう頼んだが許されなかった。

その後の容態を心配していた所、翌日になり長山通訳急性肺炎により死亡と報告があった。意外な報告に

抗議を申し込んだが取り上げて貰えず諦めるしかなかった。

やがて秋も深まり基礎工事も一段落となる頃、左官工事が遅れているので、左官がいたらやって貰いたい、いなければ外を探すとの事である。

幸い本職が二人いた。話し合いの結果は、直ぐには東京ダモイはなさそうだし、これからまた寒い冬が来る。屋外作業は辛いが壁塗りは凍らないように暖房するので温かくて良い。みんなでやる事にした。

左官が少ない、本職の一人が彼等程度の事は誰でも出来る、お前も出ろと言われ、近くにいた私と外に二人が申し出て五人になる。

監督が来て現場で塗ってみる事になった。天井を塗って見ろと言われ、先ず本職の戸島さんが「よし来た」と塗って見せると、その見事さに監督も「ハラショ、オオチンハラショ」、次に外の本職もやはり「ハラショ」次と言われて出る者がない。

私に塗れと言うのでやってみるが半分も着かず落ちてしまう。監督も苦笑いし、しかしやってくれとの事で決まる。

御蔭で二年目の冬は助かる。

厳寒時の規定で屋外作業は零下三十度、屋内作業は零下四十度で作業中止となる。左官の場合屋内作業であるが、屋外作業の関連で中止となった。

シベリアの寒波は一週間位連続の事も珍しくなかった。だが、朝出発時に四十度以下であればその後五十度近く下っても作業は続行であった。

ようやく春も近づく頃身体検査の結果三級となった者二、三百名が東京ダモイといってラーゲルを出て行ったが、果たして本当だろうか疑問は残った。

その頃より民主教育も強化して来る。時々開かれる夜の集会、日本新聞をテキストにアクチーブの人達の講義、作業疲れと眠いのに出たい者はないが、民主教育を受けない者は帰国出来ないと脅され、仕方なく出席する。

また作業の往復には赤旗の歌を唄い、いかにも民主教育に徹しているかに振る舞う。

作業場の近くをシベリア鉄道が走っていて列車が見

える。時折通るウラジオ、モスクワ間を走る列車を見て時計がわりにしている。

二階の壁を塗りながらみていた一人が突然大きな声で「日本兵が乗った列車が東へ行く、ダモイ列車だぞ」みんな寄って来て見ると確かに日本兵の乗った列車だ。

しかし本当にダモイ列車だろうか。それから時折見るようになり、確かにダモイ列車だ、俺たちのダモイも近いぞとみんなその日を待った。

しかしまた秋も過ぎ冬が来てもダモイはない。もう海が凍って船が入らない。また一冬越さなければならず一時の夢も儚く消え去る。

三度目の冬に入って、日本人の左官は腕が良いからと既に入居している家庭の補修作業を頼まれる事がある。

朝行くと、きれいにしてくれと牛乳やパン等を出してくれる。仕事を終えて帰る時など恥も外聞もなくマホルカ（茎も葉も一緒に刻んだタバコ）をくれと頼むと、持って来てくれた。帰ってみんなでわけて吸う、こんな事が楽しみの一つだった。

この春浅い四月始めに出張作業に行くように指示が出て、三十名程で警備兵二人が付いて、トラックに揺られ二時間程行くとエニセイ川の畔の大きな製材工場に着いた。

当時としては最新の設備を誇るエニセイ製材所と聞く。エニセイ川上流で切り出した大きな材木をコンベア式の揚材機で引き上げて製材している。

その流木が凍る前に揚げ切れず凍り着いている。我々の仕事はこの材木を氷の中から掘り出すのが主な仕事である。

氷の解ける前に早く掘り出さないと流れてしまうと言う。

私達にして見れば不思議な事に思える、何も無理して掘り出すより氷が解ければ楽に揚がるのにと思う。

四月とはいえ吹雪の日等は川幅数百メートルを渡る川風に身も縮む思いで、決して楽な仕事ではない。

しかし出張作業の解放感、宿舎も広く、ストーブも薪ストーブで暖く、食事もラーゲルより少しはましで、

宿舎に帰れば寛ぐ事ができた。

警備兵は下士官と兵の二人だけ、若い彼等も遊びに行きたい。「お前達逃げないか」と聞くので「逃げても日本まで行けない。行く所がない」と言えば、「遊びに行って来るから内緒にしてくれ」と言う。「日本人は口が堅いから大丈夫だ」というと安心して川を越して街へ行く。

ソ連も若い男は軍隊に取られて少ない、工場労働者は若い女性がほとんどだ。土曜日の夜などダンスに行こうと誘いに来る。ダンス等踊り度くはないが一口のウオッカー、一切れのパンに引かれて出掛けたものだった。

四月も末ともなれば川辺の柳も芽を吹き草の芽も出始める、その若芽を取って茹でて食べるのも楽しみの一つである。

牛や馬が食べる物なら人間が食べても死ぬ事はないだろうと手当たり次第採って食べた。

五月初めの穏やかな暖かい日だった。大部分の掘り出しも終り、奥に残った材木を掘り出していた日の午後のことである。突然街中のサイレンが一斉に鳴り出した。

何が起きたのか不審に思い見廻していると、工場の一人が血相を変えて早く来いと呼びにきた。後に従って急ぎ岸へ行く。もう少しで岸に着く頃には、登っている氷の下で不気味な音がして氷が浮き上がって来た。

全員岸に登って間もなく氷は割れて下に潜り物凄い轟音と共に数メートルも盛り上がり流れ始めた。

これがエニセイ川の解氷だった。なるほどこれでは解氷前に掘り出さないと北極の海に行ってしまうと納得した。

一日氷が流れて、翌日になると昨日まで氷の上を走っていたトラックに変えて汽笛の音と共に一斉に舟が走り出す。予想外にエニセイ川の解氷を見る事ができた。

出張作業も終え、また元の作業場へ戻りダモイ列車を眺めては羨んでいた。七月始めいよいよ帰してくれるというので入浴を済ませ、疱瘡、五種混合等の予防接種を受け、漸く帰れると実感が沸く。

最後に帰る日を待ちながら亡くなった友に最後の別れをして行きたいから墓参を申し出たが許されなかった。仕方なく遠くより両手を合せ冥福を祈る。

慌てて身支度を整え列車に乗る。同じ貨車だったが二段で来る時よりはましだった。十一日余り乗ってナホトカに着いてみると、前に来た人達が多勢いる。話によればここからまた奥へ帰された人も多いと聞き不安になる。

船を待つ間とまた土木作業に出される。待つ事一週間、待ちに待った船が入る。岸壁に明優丸と書かれた戦時型輸送船が停泊している。喜び勇んで乗り込み、間もなく出発した。

数時間走った頃より船は揺れて立つ事もできない。そのうちに船は嵐のため航行不能となり、日本海の真ん中で錨を下して停泊した。波に繰られる事二、三時間、最後の試練だった。

錨を揚げまた航行、翌日「日本が見えるぞ」誰かが大きな声で叫ぶ、その声にみんな甲板へ上がり遥か遠くに見える日本の山並にどっと歓声が上がる。

たしかに日本へ帰れた喜び、過ぎ去った三年を振り返り、あれ程日本に帰る日を待っていたのに儚く散って行った友の事を思えば一人喜んで良いのだろうか。しかし長く辛かった三年のシベリア抑留もこれで終わった。

【執筆者の紹介】

北野君は、大正十三年長野県上伊那軍美篤村「現在長野県伊那市美篤」に生まれ、昭和十四年三月同村立尋常高等小学校高等科を卒業し、私とは小学校から、昭和二十年まで同じ道を歩んだ。

当時次男であった北野君は、国策にそい、満蒙開拓青少年義勇軍に志願した。

昭和十四年四月十七日茨城県内原訓練所に入所。きびしい二か月間の訓練も終わり、同年六月十一日希望の地満州に旅立ち、旧満州国三江省勃利義勇軍大訓練所に入所した。

昭和十五年大訓練所の訓練も無事に終わり、同十六年ソ連との国境の地牡丹江省綏陽県老菜営義勇隊小訓

練所に入所した。

当地は、広漠たる満州の平野とは違い、日本とほとんど変わりなく、山もあり川の水もきれいである。

北野君もこの訓練所では、訓練後、入植すべき、広漠たる沃野に夢をいだき、毎日きびしい訓練に、また、軍隊の使役にと、頑張っておりました。昭和十八年に二年間に及ぶ訓練もすべて終了した。

永住の地、北満の地、北安省通北県鶏走河曙義勇軍開拓団に入植。この地は、老菜営訓練所とは違い、それは北満の広漠たる大平野で、どこを見ても、歩いても、それはただ広い原野ばかりである。

よし、ここが永住の地だ。頑張るぞと、日夜開拓に、建築にと、若い青春の血を、たぎらせておる矢先に、軍隊に召集されて、二十年七月に入隊した。

あけくれる軍隊生活も日浅く遂に二十年八月十五日終戦を迎えた。

二度となき青春の夢は破れ去り、ただただうつろに空を見つめておりました。

同年九月ソ連軍に連行され、クラスノヤルスク第三収容所に抑留された。

昭和二十三年八月に帰国。収容所では、本部付で私の第五収容所には時々事務連絡に来ていた。作業より帰って、面会人があったとの話を聞いておったが一回も面会できなかった。

帰国後その事を知り、眞に驚き、また残念がった。帰国後、家業をつぐべき兄が戦死したために、現在家業の農業を経営している。

水稲二町五反、アルストロメリヤの花大きなハウス三棟、どれも近代的設備で目を見はわるばかり多忙な経営をしながら、この間農業青壮年部員・委員長、また野菜ナメコ機械等の部会役員、日中友好協会伊那支部会員である。

旧満州を四年ばかり前に訪ねて来た。また全抑協長野県連合会長、同伊那支部会長を発足以来つとめ、長年にわたり、今も活躍しておられる。

また平成四年度シベリア墓参に訪ソし、亡き戦友の墓参にも多忙にもかかわらず参加している。

北野君はほんとうに立派な努力家であります。

（長野県　加納　武彦）

応召から帰国まで

京都府　金谷要一

応召から入ソまで

いつもながらのB29の空襲にはなれっこになっているのに、今夜の空襲は特にしつこい気がした。昭和二十年三月十三日の夜である。戸外に出て驚いた。南西の方角の空が茜色に赤く染まっている。こりゃ大変だ。足が震える感じで、気がいら立っている。大阪方面だ。

当時、私は京都から山陰線で一時間の距離にある田舎町の中学校の教師をしている兄夫婦の家に下宿して、京都大学内にある研究所に、満州の人造石油製造会社に勤務していたので、派遣されて内地勤務になっていました。

翌日出勤して大阪が全滅に焼け出されたという知らせが入って来た。ここまで米軍に迫られたら、いつまで日本も応戦できるか、不安と悲壮観で複雑な心境であった。そして神戸、名古屋と次々と焼け野原となっていった。五月十四日、仕事から帰ると「えらいこっちゃで」と義姉が召集電報が本社から来ているといって渡してくれる。

覚悟はしていた。既に沖縄も戦場になっている。今さらどれだけ抵抗ができるだろうか。心細い限りであった。憲兵隊に出頭すると、満州までの切符はすぐ買えた。博多埠頭、朝鮮の麗水の港では、満州より内地へ還送する大変莫大な物資、兵器にごった返すような兵隊の動きをみていると、まだ本土決戦も大丈夫かなアと思ったりもした。

無事入隊しましたが、毎日の訓練はたこつぼ掘り、対戦車爆雷攻撃ばかりであった。もし終戦が遅れていたら、恐らく今日の日はなかったであろうと思うと、背筋が寒くなる思いがします。ソ連の参戦が決行され、対戦車壕掘りを円匙一本で毎日毎日行い、奉天の大きな街の守りをどうしようとするのか、正気のさたとは思えないけれど、それが兵隊というものかもしれない。